

「子を愛するがために… 子を愛するがゆえに…」

エペソ人への手紙 6 : 4

July.6.2025

エペソ人への手紙 6 : 4 (パウロ)

Preface

エペソ書 5 : 15 の「ぶどう酒に酔ってははいけません。むしろ、御霊に満たされなさい」という教えの実践現場として、先ず示されたのが家庭でありました。

最初に夫と妻についての御言葉を下さり、次に親に対する子について御言葉を下さり、そして今朝は、子を前にした親についての御言葉を下さっています。

初めに、「父たちよ。自分の子どもたちを怒らせてはいけません」という御言葉です。

私にとっては、弁解の余地のない、ぐうの音も出ないような御言葉です。

主なる神様は、知っておられるかのようにです。

もちろん、知っておられるでしょう。

私たち親世代の少なくない大人たちが、どれだけ子どもたちを怒らせながら生きているのかということを神様は知っておられるがために、ズバッと、単刀直入に、「子どもたちを怒らせるのは、ちょっと辞めにしないかい」と、余りにも時宜にかなった心に刺さる御言葉を下さっていると思えてしまいます。

Part One

どの親も、自分の子どもを愛しています。

子どもたちが道を踏み外してしまわないように、良くない方に進んでしまわないように、子どもが大変な目にあって倒れてしまわないように、色んな意味で人生における大怪我を負ってしまわないようにと、いつも正しいことを言い、いつも子どもたちのためだと思うことをしてあげながら、その愛する気持ちが度が過ぎてしまつてか自分本位の正義感に捕らわれてしまうことがあります。

そしていつの間にか、知らず知らずのうちに強制的になり、高圧的に言葉を発し、それが子どもたちにとって暴力的に聞こえてしまい、暴力に感じてしまうことがあります。

あるいは、非人格的に、子どもの人格を無視し、「お前は子どもなんだから、とえあえず、私の言うことを聞きなさい。聞かなければならない。全部あなたのための事を言っている、やっていることなんだから」と、非人格的に扱われているというような思いを子どもたちに抱かせてしまいます。

即ち、無礼です。

子どもたちに対する礼儀がありません。

「無礼、礼儀がない」という表現は、大人が子どもたちに向けてだけ使える表現ではなく、本来は、子どもも大人たちに求めることの出来るものだと思います。

本当は、大人が先に、子どもたちに礼儀を払わなければならないのに、礼儀を守ることだけを強要して、子どもたちへの礼儀を守ることが私たち大人があまりにも簡単に忘れてしまいます。

子どもたちのみばかりか、自分よりも経験が浅いとか、年が若いとか、役職や肩書が低いと思える人に向かって、むやみに、やたらに、無礼になります。

特に親は、子に対して無礼になってしまうことが少なくないように思います。

そして、度が過ぎてしまいます。

心配する気持ちが大きくなり過ぎてしまうせいなのか、愛する気持ちゆえなのか、度が過ぎてしまうことがあります。

度が過ぎて、うるさい小言やおせっかい程度ならばまだかわいいかもしれませんが、手荒になってしまうことがあります。

逆に、遠慮し過ぎて、よそよそし過ぎてしまうこともあるかもしれません

「馬鹿にされた」と思ってしまうために荒々しくなったり、「変に馬鹿にされてたくない」という思いが先行してか、親側の保身のために冷淡でつれなくなってしまうのでしょうか。

いずれにしろ、度が過ぎるのは、足りないよりも厄介かもしれません。

「過ぎたるはなお及ばざるがごとし」と、やり過ぎることは、やり足りないことと同じように良くないという言葉がありますが、もしかすると、多くの親に当てはまる過ちが、やり足りないよりも、やり過ぎる時があるということかもしれません。

大人だと親だという理由一つで、正しいことを、正しい言葉を、あまりにも礼儀なく、無礼に、高圧的に、非人格的に発してしまうことがあります。

当然、子どもたちへの効果はありませんし、反発します。

耳を閉ざします。

心の戸を閉めてしまいます。

それを私たち大人は、「思春期のために行儀が悪くなった」とか、「子どもたちが変わった、昔とは違う」とかと言ってしまいがちかもしれませんが、実のところ、そうではないんだと思います。

そのようになってしまう最も端的な原因提供者が、いつも私たち大人、私たち親世代なのかもしれません。

そして、実際に今日の御言葉は、「そうだよ」と教えて下さいます。

私たち大人や親世代の人たちに対して、単刀直入にズバッと、「父たちよ、母たちよ、大人たちよ。子どもたちを、自分の子どもたちを怒らせてはいけません」と語って下さいます。

何よりも、主なる神様のお取り計らいを感じるのは、生涯独身で子どものいなかった使徒パウロ先生の心を聖霊様が感動させて下さって、この言葉を語らせなされたということです。

つまり、すべての大人たちに当てはまる言葉として下さったということなのでしょう。

神様から私たち大人へのとても重要な教訓だと思います。

子どもたちは、私たち大人が自分たちのことを思って言葉を発してくれていて、やってくれていて、それが良いことであることも分かっているように思います。

みんな知っているでしょう。

自分のために言ってくれている言葉だということを、子どもたちみんな分かっていると思います。

それが正しいことも知っているでしょう。

でも聞きません。

では、何で聞かないのでしょうか？

大人や親たちは、正しい言葉、良い行いを、子どもたちの気分を悪くする方法で伝える、至って特別な能力があるからなんだと思います。

だから、子どもたちが拒絶するわけですね。

なのに、親や大人たちは、それが分かりません。

自分が正しいことを言って、良いことをやっているということだけに、「子どものことを思って言ったんだ」と、「やったんだ」と、「私があなたのことをどんなに愛しているのか!」、それしか分かりません。

親や大人の態度や姿勢や言動が、子どもたちに拒絶反応を起こさせるほどに、子どもたちを怒らせるほどに間違っているという事実を分かっていない、分かろうとしない、中々理解しようとしなないことが多いんだと思います。

私自身、私の母に子として接していて、一番もどかしいと思うのがこの部分です。

「私がどれほどにあなたのことを愛しているのか分かる？ 分からないからそんなこと言ったりするのよ…」という母に、「いやいや、違うんだって」と言っても、中々分かってもらえないのと同じように、今度は、我が家の子どもたちが、私に対して全く同じように思っているのに、それを分かろうと、理解しようとしなない親である私がそこにいます。

それゆえに、今日の御言葉は決して聞き流すことの出来ない、今を生きる私に、今を生きる私たち大人に、今を生きる親たち世代に、神様が下さっている言葉なんだと思えてきます。

この言葉が語られてから2000年間ずっと変わらず有効で、大切な神からの言葉です。

中々そうすることが出来ない、すべての親や大人たちが失敗して来た神の言葉なんだと思います。

それでも、神様は諦めなさることなく、なおも語り続けて下さいます。

なぜなら、出来るからです。

御霊に満たされることによって成せるからです。

神の助けを求め、イエス様に寄り頼むことを練習し続けることをもって、神の前に降参することをもって出来てくるようになる、少しずつでもそうなれるからなんだと思います。

Part Two

この父と子、親と子、大人と子の話をする上で決して忘れることの出来ない重要な御言葉があります。

マラキ書4書の御言葉と、エリヤの生まれ変わりであるバプテスマのヨハネの誕生について記しているルカの福音書1章の御言葉です。

先ずマラキ書から見てみましょう。

マラキ書4：5－6（パワポ）

「父の心を子に向けさせ、子の心をその父に向けさせる。」

マラキ書は旧約聖書の最後の書物であります。

紀元前の時代、旧約時代における神からの啓示の言葉が、このマラキ書をもって終わります。

この後400年間、イエス様がお生まれになるまで、新約時代・紀元後の時代に入るまで、一切の神からの啓示の言葉が与えられなくなってしまいます。

正にこのマラキ書の言葉をもって、紀元前の時代、旧約時代が幕を閉じるんです。

そしてこの旧約時代、最後の最後に神が語って下さった約束・言葉が、「父の心を子に向けさせ、子の心をその父に向けさせる」という御言葉です。

神の言葉が人に臨み、キリストの救いが人に臨んだ時、父と子の関係が回復され、親子関係が回復され、大人と子どもの関係が回復され、家族関係が癒され、安らぎ、円満になるということを連想させるような言葉をもって旧約時代は幕を閉じます。

創世記からこのマラキ書に至るまで、旧約聖書39巻、こんなに分厚く、2000年近くの歳月をかけて書き記された神の啓示の言葉の締めくくりが、私たち人間の家族・家庭のことなんです。

どれだけ神様は、私たち人間の家族関係が壊れてしまったことを、親子関係が千切れてしまったことを、大人と子どもの関係が歪んでしまったことを嘆き、痛み、悲しんでおられたのか… 悲しんでおられるのか…

天地万物の創世から始まった壮大な神の摂理を現し、語り、示し続けた旧約

聖書旧約時代の締めくくりの言葉が、父と子の関係回復なんです。

もちろん、ここで言う「父」は父なる神を指し、「子」は、放蕩息子の例え話に代表されるように、神から離れて道に迷い彷徨っている私たち罪人のことをも意味している言葉であり、神と人との関係回復をも表している預言の御言葉だということは明らかだと思いますが、

それと同じように重要なこととして、私たち人間の父と子の関係という、人が罪人となって以来、世代を時代を超えて、人が生活していく上で最も大きな問題と言っても過言ではない「家庭の不和」という問題における解決、癒し、回復が約束されている御言葉でもあると思います。

ちゃんと理由があります。

「父」と日本語で訳されている言葉は、言語では「父たち」という複数形であり、「子」と訳されている言葉も、言語では「子たち」という複数形なんです。

そしてこれが新約聖書に入りますと、ちゃんと、「父たち、子たち」と、言語通り複数形で訳されているんです。 ルカの福音書です。

ルカの福音書 1 : 13 - 17 (パワポ)

マラキ書の最後でその到来を約束されていた預言者エリヤが、キリスト・イエスの道を備え、神の言葉を宣べ伝えるバプテスマのヨハネとなって生まれて来ると、御使いがその両親に告げてくれながら言った約束の言葉が、さっきのあのマラキ書の言葉、「父たちの心を子どもたちに向けさせ、子どもたちの心をその父たちに向けさせる」という親子関係の回復、家族関係の癒し、大人と子どもとの関係の復興でした。

そしてこのルカの福音書では、聖書の言語通り、「父たち、子たち」と複数形で訳してくれています。

要するに、マラキ書とこのルカの福音書の御言葉の成就の約束が語ろうとしていることは、「父と子の関係回復、母と子の関係回復、大人と子の関係回復は、大人や親自身の神との関係回復に比例し、子どもたちの神との関係に比例する」ということを教えて下さっているんだと思います。

私自身、このマラキ書とルカの福音書の御言葉の恵みを、父との関係において実際に体験させて頂いたように思いますし、今現在は、四苦八苦しながら沢山の失敗とともに、我が家の子どもたちとの関係において毎日少しずつ豊かに体験させて頂き、味わわせて頂いているように思います。

子どもたちに我を張って、親として荒くれてしまった時に毎回神様に示されるのは、「あなたが悪い。あなたが足りない。あなたが折れなさい。あなたが謝りなさい。あなたが子どもたちを傷つけた」ということです。

その神からの迫りを、毎回、先ずは跳ね除けてしまいます。

「いや、あいつらが生意気なんです。あの子たちが先に謝ってきたら赦してあげると同時に、ちょっとだけ謝ります」という思いに固執しますが、毎日御言葉を讀んで、祈って、牧師として、クリスチャンの父として生きようとしますと、もうそんな我なんか張ってられなくなります。

恥ずかしながら毎回、「ごめんね。ごめんなさい」と子どもたちに謝ざるを得なくなります。

謝ったからと言って、それで済むわけではないと思いますが、子どもたちに謝らないと、私自身の神様との関係が成り立たないんです。

「人を自分よりもすぐれた者と思いなさい。キリスト・イエスにあるこの思いをあなたが抱きなさい」という言葉が、痛いほどに迫って来ます。

そして、今日の御言葉が、聖書から飛び出て来るかのように、神の愛として迫ってきます。

「あなたの子どもたちを怒らせてはいけません。子どものことを思つてのことだということをわたしも分かっているけれども、重要なことは、子どもたちを怒らせては何の意味をもなさなくなってしまうから、人格的に接して上げなさい。度が過ぎないように気を付けなさい。子どもたちにも礼儀を払いなさい」と、親身になって神様がお語り下さっているように感じます。

Part Three

さらにもう一箇所、このエペソ書の御言葉を黙想していると、思い出される御言葉があります。

ヨハネの黙示録 3：20 の御言葉です。

ヨハネの黙示録 3：20 (パウロ)

神様というお方は、入って来たくて戸をたたかれるお方です。

入って来たければ、入ってしまえばいいだけのことです、神様なんですから。

「わたしは神だ」と言いながら私たちのうちに入って来られたら、私たちがそれに対して何か言ったり、妨げたりすることが出来るでしょうか？

もし入って来られたとしても、私たちにとっては良いことでしかないでしょう。

人は、神と一つとなつては初めて幸いであり、真に生きる者となるのですから。

でも神様は、力づくで入っては来られません。

戸の外に立ってたたいて下さいます。

いつまで？

私たちが、私たちの戸を自ら開けて差し上げるまでです。

「あなたが戸を開けてくれるなら、入りましょう。それまでは、私は、戸の外に立って待ちます」と仰せになります。

このヨハネの黙示録の御言葉が好きな方も沢山いらっしゃると思いますが、私もこの言葉を聞くと、申し訳ない気持ちとともに温かい気持ちになります。

なぜならそこに、神様のお気遣い、私たちへの神の礼儀を見るからです。

天地万物をお造りになられた父なる神、御子なるイエス様、聖霊なる神の三位一体なる神様は、私たち被造物に、礼儀を教えて下さいます。

何でお分かりになるのでしょうか？

愛しておられるからです。

第一コリント 13 章は愛について書かれている愛の章ですが、その中に、「愛は礼儀に反することをせず」とあります。

神の前にあって礼儀もへったくれもない罪だらけの私たちに対して神様は、その愛を、礼儀を守る・礼儀に反することをしないということをもって表して下さい。

感動と言いましょか、申し訳なさ過ぎて返す言葉が見つかりません。

だから、「父たちよ、自分の子どもたちを怒らせてはいけません」というこの御言葉を練習することを、学習することを、実践することを諦めない信仰者でありたいと願うんです。

Part Four

ただ、ここまでお聞きになりながら、疑問を持たれた方もいらっしゃるかもしれません。

「本当にそれでいいの？ やっぱ子どもは厳しくしつけなきゃ。だって聖書にも書いてあるでしょ？ 『むちを控える者は自分の子を憎む者。子を愛する者は努めてこれを懲らしめる』ってね」と思われた方がいらっしゃるでしょうか。

もちろん、この御言葉も神の大切な言葉であり、しっかり心に刻まなければならない御言葉です。

確かにこの御言葉が示唆して下っていますように、すべての子どもたちは、生まれながらの罪人ですから、子どもたちだけで良い物が出て来ることにはならないでしょう。

モンテッソーリ教育、モンテッソーリ幼稚園というような名称をお聞きになったことが御有いかと思います。

イタリアのマリア・モンテッソーリという女性が提唱した教育方法ですが、それまでの家父長制度的な押し込み詰め込み、「大人から子どもへと、教育を施す側の都合による高圧的な教育スタイルではなく、教育を受ける側の立場から教育を考えましょう。教育を受ける側の子どもの意志を尊重し、自ら決めさせ、選択するようにしましょう」と、それまでの教育の世界に一石どころか、

現代にまで大きな影響を及ぼすほどの偉大な提唱・業績だったということは事実だと思いますが、これを聖書的に見たらどうなのか、聖書の語る人間とは何なのかという重要な神学的問題を看過してはいけないと思います。

つまり、人は生まれながらの罪人で、その内から、放っておいて自然と良いものは出てこないということです。

むしろ、悪さが出てくる。

「人という存在は、楽観的な存在ではなく、のろいと苦みに満ちていて、破壊と悲惨があり、平和の道を知らないだけでなく、行き着くところ神に対する恐れのかけらもない」と聖書は教え、それゆえに、「神が人の姿をとってこの地にいらっしゃらなければならず、何の罪もない人の姿をお取りになった神なるお方イエス様が、私たち人間の罪の身代わりに十字架につけられなければならなかった」と教えて下さいます。

「人は元々自ら善なるものを備えているがために、一切の抑圧を排除し、高圧的にならず、良い環境と条件の中で啓発して行けば、その中で自然といくらでも美しく、価値のあるものを花咲かせることが出来る」というモンテッソーリ博士の提唱する教育理念を全面的に支持するようなことを聖書は語りません。

聖書は、人が罪人であることを語ります。

実際に、モンテッソーリ教育は、個性とか自己を尊重することを大切なモットーとしているために、反面では協調性がなく、自己中心的な行動を起こしやすい結果を招くとも言われているようですが、もしそうであるならば、聖書が言っていることが事実なんだと思います。

つまり、大人が子どもたちを教育するに当たって、良いと思われることをしっかりと教え込むということは、なくてはならないことなんだと思います。

何でもかんでも許し、何でもかんでも受け入れるということが、「自分の子どもたちを怒らせてはいけません」という意味ではないということだと思えます。

「自分の子どもたちを怒らせてはいけません」という言葉は、子に対する厳しさを否定している言葉ではなく、「その厳しさ、本当に厳しさですか？ もしかしたら、親としての、大人としてのあなたの行き過ぎた間違った正義感ではないですか？ 子を通して得ようとしている自己実現だったり、プライドだったりしませんか？ そして、厳しさという言葉に逃げて、子どもたちを怒らせているだけになっていませんか？」と指摘して下さっているように感じます。

だから、その次に続く言葉、「むしろ、主の教育と訓戒によって育てなさい」という御言葉が大事になってくる、核となってくるのだと思います。

この御言葉については来週考えていきたいと思いますが、私たち親・大人が、主の教育と訓戒に従って子どもたちを育てるためには、私たち親や大人が先に、主の御言葉の前にひれ伏し、学び、受け入れ、黙想し、考え、食べ、

反芻し、その甘みと苦みを味わわせて頂きながら、その味わいとともに跪いて主に祈らなければならないでしょう。

私のイメージ、私の思い描く、私の中で勝手に作り上げたキリスト教観、信仰観、神観、愛や正義を語り、教え、伝えるのではなく、実際に神の言葉を読み、接し、食べ、実際にそこから語られるものを知ってでないと、子どもたちを怒らせてしまうスパイラルから抜け出すことは出来ないでしょう。

Conclusion

私たち親やお爺ちゃんお婆ちゃん世代の者たちが、大人たちが、子に教える前に、神に、御言葉に、祈りをもって、礼拝を真摯に守ることを通して、先ず先に教えられる者でありたいと願います。

それなくして、今日の御言葉「父たちよ。自分の子どもたちを怒らせてはいけません。むしろ、主の教育と訓戒によって育てなさい」という神の方法に従って、子たちを教え、育てることは出来ないでしょう。

そして何よりも、本当に、私たち大人であるクリスチャンたちが、主の教育と訓戒によって子どもたちを育てたいと思っているのかが、問われているように思います。

このことを持って、遡りつつ、祈っていきましょう。

お祈りいたします。

祝祷：エペソ 6：4